

# ‘The Magi’ と ‘The Dolls’ における新しい創作の方向性

永 田 節 子\*

## W. B. Yeats’s Pursuit of the Image in ‘The Magi’ and ‘The Dolls’

Setsuko Nagata

**Abstract :** W. B. Yeats is interested in the relation between the real world and the ideal world. So, the energetic power and the wild imagination are required to connect the two opposite worlds in his poems. From this point of view, he composed ‘the Magi’ and ‘the Dolls.’ His concern for the poet’s responsibility is also related to the image of these poems.

**Key words :** the Magi, the Dolls, image

### 序 論

詩集 *Responsibilities* はイエイツの創作活動における転機となっており、創作に関して彼の新しく進むべき方向性を示している。彼はこの詩集において新しい試みをおこなっている。この詩集の作品の配置として、最初と最後にジョージ・ムーアへ向けて書かれた作品が置かれており、最終のムーアへ向けた作品の直前には ‘A Coat’ という作品がある。この作品のなかで、彼は具体的な言葉で彼自身の創作の手法を変えると宣言を行っている。そして ‘A Coat’ という作品の直前に配置されたのが寓話 (fable) を作る試みとして創作された ‘The Magi’ と ‘The Dolls’ という作品である。この二つの作品は ‘A Coat’ における具体的な表現では語りきれないイエイツ自身の創作における立場や、今後の彼の創作の方向性を暗示しようとしたと考えられるのである。そこで ‘The Magi’ と ‘The Dolls’ におけるイエイツの新しい試みについて考えていくことにしたい。

### 本 論

‘The Magi’ と ‘The Dolls’ は、それぞれのタイトルの前に I と II という番号を割り振られて一対の作品を構成するように作られていた<sup>1)</sup>。‘The Magi’ と ‘The Dolls’ は最終的にはタイトルだけになり、独立した作品のように並べられるのであるが、この二つの作品はどちらも作品の最後に 1913 年 9 月 20 日と日付が入れられて同じ日に創作されたことが強調されており、‘The Dolls’ に付けられた注においても、この二つの作品は補い合うものであると述べられることになる<sup>2)</sup>。作品のタイトルは彼の創作意図と深い関係があり、イエイツはこの二つの作品を並べることによって、創作における新しい試みを行おうとしていたのである。その試みが何であったのかを ‘The Dolls’ という作品から分析をはじめることにはしたい。

### ‘The Dolls’ 分析

‘The Dolls’ という作品において、人形達は彼らの世界に突如登場した人間の赤ん坊を彼らの名誉を汚す存在であるとわめき叫ぶ。最初、

\*関西福祉科学大学健康福祉学部 教授

人形達は‘That is an insult to us.’と赤ん坊を that と呼び捨て語り始める。彼らは赤ん坊の存在は侮辱であると憤慨し、赤ん坊を騒々しい汚れたもの (a noisy and filthy thing) と呼び、人間世界に対して挑戦的で敵意と軽蔑をあらわにするのである。人形達は自分達の世界を this place, hither として赤ん坊に代表される人間世界と区別する。ここで‘The Dolls’ という作品を引用する。

‘The Dolls’

A Doll in the doll-maker’s house  
Looks at the cradle and bawls :  
‘That is an insult to us.’  
But the oldest of all the dolls,  
Who had seen, being kept for show,  
Generations of his sort,  
Out-screams the whole shelf : ‘Although  
There’s not a man can report  
Evil of this place,  
The man and the woman bring  
Hither, to our disgrace,  
A noisy and filthy thing.’  
Hearing him groan and stretch  
The doll-maker’s wife is aware  
Her husband has heard the wretch,  
And crouched by the arm of his chair,  
She murmurs into his ear,  
Head upon shoulder leant :  
‘My dear, my dear, O dear,  
It was an accident.’

人形のせりふとして引用符がつけられた詩句を取上げると、人形達は墮落、不浄 (filthy) という言葉で人間世界を代表する赤ん坊を形容し、人形の世界には悪 (evil) というものは存在せず、人間世界が悪 (evil) であると対比して示そうとする。つまり、この人形達の世界に悪 (evil) と形容できる人間世界が持ち込まれたことは、彼らにとって侮辱であるということ

になるのである。「怒鳴る」「絶叫する」(bawl, scream out) という動詞が使われ激しい口調で語られるせりふや詩句には、以前と異なるイエイツの手法がみられる。

このような作風の変化の背景に、イエイツ自身が当時の社会の変化を感じ、それに対応することを考えていたということが影響しているけれども、イエイツが1896年12月にアルフレッド・ジャリの人形劇「ユビュ王」を観劇した経験<sup>3)</sup>も大きく関係していると考えられる。そこで、イエイツが「ユビュ王」の初演の舞台を見た経験について書いていることを引用することにした。

I go to the first performance of Alfred Jarry’s *Ubu Roi*, at the Theatre de L’Oeuvre, with the Rhymer. . . The audience shake their fists at one another, and the Rhymer whispers to me, ‘There are often duels after these performances’, and he explains to me what is happening on the stage. The players are supposed to be dolls, toys, marionettes, and now they are all hopping like wooden frogs, and I can see for myself that the chief personage, who is some kind of King, carries for scepter a brush of the kind that we use to clean a closet. Feeling bound to support the most spirited party, we have shouted for the party, but that night at the Hotel Corneille, I am very sad, for comedy, objectivity, has displayed its growing power once more. I say, ‘After Stephane Mallarme, after Paul Valaine, after Gustave Moreau, after Puvis de Chavannes, after our own verse, after our subtle colour, and nervous rhythm, after the faint mixed tints of Conder, what more is possible? After us the savage God.’<sup>4)</sup>

1896年初演のジャリの人形劇で、人形たちがそれまで人前で本来使うべきではないとされ

ていた悪態をつく言葉遣いをし、激しく飛び跳ねぶつかりあう舞台を観たことがイエイツに与えた影響は非常に大きなものであった。この舞台を観た後、イエイツは大きな衝撃を受け、同時代の作家達や彼自身も書いていた詩、そのリズムなどは終わってしまったのではないかと考えたのである。

ところで ‘The Dolls’ という作品で人形達は悪態をつき激しい口調でののしるのであるが、この作品にイエイツがつけた注のなかで、人形達は怒り狂う (enraging dolls) と形容されている<sup>5)</sup>。人形の形容をするのになぜ *enraging* という表現が使われているかということに関して ‘The magi’ という作品との関係から、改めてあとで考察することにしたいが、人形達がこのように怒り狂って叫ばなければならない状況について、‘Beggars to Beggars Cried’ という作品との関連からまず考えてみることにしたい。

### ‘Beggars to Beggars Cried’ 分析

‘The Dolls’ という作品において人形達は異様といえるほどの罵倒するような口調で叫ぶのであるが、「叫ぶ」ということ自体が作品のタイトルとなっている作品 ‘Beggars to Beggars Cried’ (「乞食が乞食に叫ぶ」) がある。‘The Dolls’ という作品の場合、人形が叫ぶ対象は悪 (evil) という形容が当てはまる人間世界に対してであるが、同様に、乞食<sup>6)</sup>は人間世界に付きまとう悪について語り、世俗の現世への想いから抜けられないことに狂乱して叫ぶのである。乞食は、現実の人間世界とは異なる世界へ向かうために魂の用意をする必要を語るものの、関心をもってみつめるのは世俗の現世であり、そしてその人間世界に付きまとう悪である。

#### ‘Beggars to Beggars Cried’

‘Time to put off the world and go somewhere  
And find my health again in the sea air.’

*Beggars to beggars cried, being frenzy-struck,*

‘And make my soul before my pate is bare.’

一連の一行目は乞食の「世俗の世界を捨てて、どこかに出かけなければならない。」という詩句からはじまる。そしてその後すぐ二行目で、「海の空気のなかで再び健康を取り戻さねばならない」と続くのである。第一連は、世俗の世界を捨てどこかへ行く世捨て人の語り口で始まりながら、世俗の現世である海辺で健康を取り戻そうと願うという矛盾した乞食の想いが示され、その後で更にもう一度 *and* という言葉を繰り返して乞食は魂の用意をしておこうと語るのである。魂 (my soul) という言葉は乞食が向かう世界 (somewhere) が「この世にあるどこか」ではないことを暗示し、乞食はもう一度世俗の世界を捨てて、「理想とする世界であるどこか」へ行く準備をしようということになる。この詩の第一連は四行から構成されているが、四行の詩句のなかで *and* という言葉が意図的に二度繰り返されている。意図的にというのは *and* という接続詞が使われているものの、語られる内容は矛盾する正反対の内容なので、乞食の願うことは矛盾した内容を同時に含むことになる。そして、この詩の全体の構成も一連で示された矛盾を反映させた展開となっているのである。

この詩は、冒頭で「世俗の世界をすててどこか理想のところへ出かけよう」という決意が述べられ、一連の最終行で「魂の用意をして出かけていかねばならない世界」が語られるにもかかわらず、乞食は捨てるはずの世俗の世界への執着ばかりを募らせるという構成となっている。二、三、四連でも、乞食は世俗の生活への関心を語りつづけるのであり、結婚などの日常生活をどうすればいいかということに頭を巡らせるのである。

二連では、人間世界への執着が語られ、人間が原罪から逃れられないということが *devil* という言葉によって強調されている。

‘And get a comfortable wife and house  
To rid me of the devil in my shoes,’  
*Beggar to beggar cried, being frenzy-struck,*  
‘And the worse devil that is between my  
thighs.’

更に三連では、世俗の人間の生活は悪の影が付きまとうと描かれている。人間の日常世界は悪と関係がきれないことが、日常世界を映し出したはずの鏡には悪魔 (devil) が映し出されていると表現されているのである。

‘And though I’d marry with a comely lass,  
She need not be too comely — let it pass,’  
*Beggar to beggar cried, being frenzy-struck,*  
‘But there’s a devil in a looking-glass.’

さて二連や三連で取上げられた devil の話題は終わってしまい、四連では結婚の話題をきっかけとして世俗の世界への想いが語られる。最終の五連でも魂や、人間世界における悪の話題はとりあげられない。最終の五連を引用する。

‘And there I’ll grow respected at my ease,  
And hear amid the garden’s nightly peace,’  
*Beggar to beggar cried being frenzy-struck,*  
‘The wind-blown clamour of the barnacle-  
geese.’

乞食は目的地として向かったところ (there) では快適に暮らせて尊敬されるだろうと語りはじめる。未来形で書かれているので、乞食のどこかへ行こうという願いはいまだに実現せず、一連の一行目の世俗を捨ててどこか (somewhere) へ行こうという状況と全く同じであることが描かれる。

ところで、この詩は、乞食の向かおうとする世界は魂の用意をする必要があるところであるかもしれないし、単に地上の快適なところではないかと思わせる曖昧な描き方でおわるのであ

る。五連の最終行は夜に吹く風に流されて聞こえてくるカオジログンという鳥の鳴き声 (The wind-blown clamour of the barnacle-geese.) を耳にするということで終わるが、この鳥の鳴き声は魂の用意をして出かける世界に関係するものとして詩集 *Last Poems* に収録されている作品、1938年に書かれた ‘High Talk’ においても取上げられているのである。‘High Talk’ では、聖人マラカイがこの鳥の鳴き声を耳にしつつ、暗闇から光の世界へ歩んでいこうとすると描かれている。しかしながら ‘Beggar to Beggar Cried’ では、その鳥の声は風に流されてかすかに聞こえてくるだけで、乞食のいるところは夜の庭 (garden’s nightly place) であり、‘High Talk’ の場合のように闇から光の世界へ向かう夜明けではないのである。

乞食が魂の用意をする必要のある場所、理想の場所へ進めず暗闇に留まるということを示す工夫として garden’s nightly place という表現がおこなわれているのであるが、草稿の途中ではこの詩句は garden full of (?pear) apples という表現もなされていたのである<sup>7)</sup>。人間が楽園を追われる以前の理想郷、原罪とはまだ無縁であるところ、理想のアルカディアとしての庭、つまり魂の用意をしていく必要のあるところという意図をイエイツは創作の途中で持ってはみたものの、最終的にはそれを somewhere の一つに相当するものとして、イエイツの求める独自の理想郷の意図が狭められないようにあえて曖昧にしたのである。‘Beggar to Beggar Cried’ の場合、乞食の向かうところは somewhere と語られるだけでなくならず、目的地となるところは魂の用意をして出かけなければならないところであるのか、あるいは地上のどこかなのか意図的に曖昧に描かれているのである。乞食は「さあ、出かけねばならない。」という決意を繰り返すという状況から抜け出せないことが描き出されるように意図されているのである。

ところで ‘Beggar to Beggar Cried’ と ‘The

Dolls’ とに共通することは、世俗の人間世界と、その世界とは異なるところが取上げられ、更に人間世界は原罪と深い関わりがあると暗示されていることである。‘The Dolls’ で人形が赤ん坊に代表される人間世界、悪 (evil) と形容できるような人間世界に憤慨し怒り狂い悪態をつき叫ぶ状況と、‘Beggar to Beggar Cried’ で乞食が原罪と関係深い人間世界を捨てようと叫びつつ、同時にそのような悪の付き纏う人間世界に執着せざるをえず、このような状態から抜け出せない自身に怒り狂い叫ぶ状況とは、どちらの場合も相異なる二つの世界への関心が描かれ、そして更に原罪と関係が切れない人間世界への怒りが共通してとりあげられているのである。

乞食がこのように狂乱して叫ばなければならぬ状況は being frenzy-struck という詩句で喩えられており、Beggar to beggar cried being frenzy-struck, という詩句は、この詩を構成する五連のすべてにおいて、全く同じ詩句のままイタリック体で五回繰り返され強調されているのである。乞食が理想の世界を目指そうとするにも関わらず、世俗の生活に囚われてしまうことに狂乱して「叫ぶ」という状況が作品のタイトルとなっているのである。

ところで ‘Beggar to Beggar Cried’ や ‘The Dolls’ と同様に、異なる世界への関心が描かれている作品として、‘The Cold Heaven’ や ‘The Magi’ とを取りあげることにするが、まず ‘The Cold Heaven’ からみていくことにしたい。

### ‘The Cold Heaven’ 分析

‘The Cold Heaven’ という作品は、氷が燃え尽きながらもより一層凍った氷であるようなところ、つまり the cold heaven という喩えでしか語れない状況をこの作品のテーマとして取上げており、その状況はそのまま詩のタイトルともなっているのである。‘The Cold Heaven’ を引用する。

### ‘The Cold Heaven’

Suddenly I saw the cold and rook-delighting  
heaven

That seemed as though ice burned and was  
but the more ice,

And thereupon imagination and heart were  
driven

So wild that every casual thought of that and  
this

Vanished, and left but memories, that should  
be out of season

With the hot blood of youth, of love crossed  
long ago ;

And I took all the blame out of all sense and  
reason,

Until I cried and trembled and rocked to and  
fro,

Riddled with light. Ah! when the ghost be-  
gins to quicken,

Confusion of the death-bed over, is it sent

Out naked on the roads, as the book say, and  
stricken

By the injustice of the skies for punishment?

the cold heaven と喩えられるところは、想像力や心がこの世のものではなく狂ったような、つまり wild としか喩えようのない状態になり、日常の思考が消えてしまうような状況として描かれている。Albright は、イエイツがこの詩を書いた時期にはまだ A Vision を書いていなかったけれども、この詩は A Vision を先取りしたものであると指摘している<sup>8)</sup>。ただ、イエイツがこの時期にこの作品を書いたのは、心やイマジネーションが wild と形容できるような状態になる状況に関心があったからであると考えられる。彼は現世と理想とするところとの繋がりを作ることを可能とする状況に関心を持っていたのであり、その視点から彼独自のイマジネーションやイメージが生まれる状況に関心を抱いて、その状況を the cold heaven と喩え

てこの作品においても追求したのである。更に記憶を問題とする際に、愛 (love) と関わる記憶を取上げることにイエイツ独自の立場がみられるのである。

‘The Dolls’ において人形達が原罪と関係深い人間世界に憤慨して人間世界を糾弾したように、the cold heaven と喩えられるところでは、心やイメージーションを wild と形容できる状態にさせることによって、人間の現世での出来事の記憶、愛 (love) に関わりのある記憶を呼び覚まさせて、その記憶が感覚と理性によって責められ、糾弾されることになる状況が求められているのである。

イエイツは現実と理想の世界に彼独自の関わりを作り上げることを目指して ‘The Dolls’ ‘Beggar to Beggar Cried’ ‘The Cold Heaven’ という作品を創作し、二つの世界をつなぐ為には原罪と関わりの深い人間世界に憤慨し怒り狂う (enraging) 状況や、being frenzy-struck と形容できる状況、つまり、悪の付き纏う現世の人間世界に惹かれてしまうことに狂乱して叫ばざるを得ない状況、そして心やイメージーションが wild と形容される状況を強調するのである。更に、現実と理想の世界にイエイツ独自の関わりを持たせようとする際に、‘The Dolls’ ‘Beggar to Beggar Cried’ ‘The Cold Heaven’ という作品は、人間世界を原罪と深い関わりを持つものと捉えているということにおいても共通点がみられるのである。更に又、‘The Magi’ という作品も最終行で bestial という言葉が使われているように、人間世界と罪との関わりを取上げている。そこで、次に、‘The Magi’ と ‘The Dolls’ という作品を ‘The Dolls’ にイエイツがつけた注との関わりから考えてみることにしたい。

#### ‘The Dolls’ と ‘The Magi’ 分析

‘The Dolls’ という作品にイエイツが1914年につけた注を引用する。

#### ‘The Dolls’

The fable for this poem came into my head while I was giving some lectures in Dublin. I had noticed once again how all thought among us is frozen into ‘something other than human life.’ After I had made the poem, I looked up one day into the blue of the sky, and suddenly imagined, as if lost in the blue of the sky, stiff figures in procession. I remembered that they were the habitual image suggested by blue sky, and looking for a second fable called them ‘The Magi’, complementary forms of those enraged dolls. – 1914<sup>9)</sup>

イエイツのイメージへの関心は、当時のイマジズムやエズラ・パウンドからの影響が考えられる。パウンドの指摘するように、‘The Magi’ という作品の最初の五行はイマジズムの影響を受けていると考えることができる<sup>10)</sup>。しかしながら、イエイツはあくまで彼独自のイメージへの取り組みを行っているのである。ここで ‘The Magi’ という作品を引用することにしたい。

#### ‘The Magi’

Now as at all times I can see in the mind’s eye,  
In their stiff, painted clothes, the pale unsatisfied ones  
Appear and disappear in the blue depth of the sky  
With all their ancient faces like rain-beaten stones,  
And all their helmets of silver hovering side by side,  
And all their eyes still fixed, hoping to find once more,  
Being by Calvary’s turbulence unsatisfied,  
The uncontrollable mystery on the bestial floor.

‘The Magi’ で東方の三博士らしき人影 (the Magi) が空に浮かんだり消えたりすると描かれるのは、‘The Dolls’ の注で語られるような行列する人影 (stiff figures in procession) に相当するイメージが一瞬現われ出した状況をうつすものである。このイメージが啓示のような働きをすることによって作り出されることが待望まれているのは、現実の人間世界とは異なる理想の世界、つまり新しい時代が生み出されるという予兆なのである。‘The Magi’ という作品においては、キリストの誕生によってはじまった時代とは異なる新しい時代の予兆を暗示することが試みられており、歴史的な視点で啓示に関わりを持たされることになるのである。

ところで ‘The Magi’ という作品は、‘The Dolls’ という作品の場合と同様に、現実世界と理想の世界との関わりが作りあげられる為には強力な力が働く必要があることを暗示している。‘The Dolls’ という作品をふりかえってみると、人形達が人間世界を見下すという構造を作り上げ、人形達 (dolls) の属する世界が理想の世界であることを示し、人形達は原罪から逃れられない人間世界に憤慨し、獷猛にいどみかかるように挑戦してくるのである。このように人形達が描かれるのは、人間世界とは異なる世界と人間世界との関わりが作られる為には、原罪と関係の深い人間世界への憤慨から生じる獷猛な力が働く必要があるということが暗示されているのである。それ故に、この詩の注で *enraging dolls* という表現がなされ、人形の形容に *enraging* という言葉が使われることになるのである。

同様に、‘The Magi’ の *the uncontrollable mystery on the bestial floor* という最終行でも、理想の世界、つまり新しい時代の到来をもたらすものが生まれ出るためには、*mystery* という言葉に *uncontrollable* という形容がつけられているように、制御できないような力を持った獷猛なエネルギーが必要とされることが暗示されているのである。

‘The Magi’ と ‘The Dolls’ という作品において the Magi (東方の三博士) のイメージは啓示をあたえる役割を、the dolls (人形) のイメージは人間世界に非情に獷猛な働きかけを行う役割を果たすように作られている。イエイツは ‘The Magi’ と ‘The Dolls’ という作品それぞれに、イメージを集中的に分散させて作品をつくりあげたのであり、それ故、この作品は最初タイトルの前に、数字の I と II がつけられた二部構成からなる作品となっていたのである。

ところで、イエイツが the Magi や the dolls というイメージを作り上げようとしたことは、The Savage God への関心と重なり合うのである。イエイツはジャリの舞台について書いたエッセイの結びを、‘After us the Savage God’ と予言のような暗示的な表現で終わらせているが、彼は、the Savage God と喩えられるような存在が生み出されることを待望んだのである。彼の作り上げた the Magi と the dolls というイメージは、The Savage God と喩えられるような存在があらわれ出ることを可能にさせるイマジネーションへの関心から生み出されたものである。

イエイツは、‘The Magi’ と ‘The Dolls’ という作品において The Savage God に相当するものが現われ出る、つまり、読者のイマジネーションのなかに作り出されることを求めたのであるが、The Savage God に相当するものが作られることを可能にさせるイマジネーションは、悪や罪と関係が切れない人間世界に怒り狂う状況から生み出される獷猛な力やエネルギーを必要とするのである。The Savage God が現われ出ることによって理想とする世界との関わりが作り上げられるためには、このような獷猛な力やエネルギーを生み出す状況や、心やイマジネーションが *wild* という形容で喩えられる状況を必要とするのである。彼は今後の創作活動においても、このようなエネルギーを生み出す状況を追求していくことになるのである。

イエイツは、*Responsibilities* という詩集の最

後を締めくくるにあたって、混乱した時代におかれた詩人の果たすべき責任として、新しい時代の到来を啓示できる超越的な存在、The Savage God と喩えられるような存在が生み出されるのに必要である獐猛なエネルギーを求めて the Magi と the dolls というイメージを作り上げたのである。この作品以降、イエイツは彼の理想とする世界への繋がりを作り上げることのできる独自のイメージをより一層追求していくことになるのである。そして、イエイツは‘The Magi’ にみられるような歴史的視点を重ねた新しい試みを今後も引き続きおこなっていくことになるのである。

引用した作品はすべて W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* (London: Macmillan 1933) による。

#### 引用文献

- 1) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats The Poems* (London: J. M. Dent & sons Ltd. 1990), p. 544.
- 2) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 531.
- 3) John S. Kelly, *A W. B. Yeats Chronology* (New York: Palgrave Macmillan, 2003) p. 41.
- 4) W. B. Yeats, *Autobiographies*. (London: Macmillan, 1955) pp. 348-49.
- 5) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 531.
- 6) この詩において、乞食は現世を見つめる独自の視点を持ち、現世から覚醒する可能性を秘めた存在という意義を持っている。
- 7) Ed., William H. O'Donell, *Responsibilities - Manuscript Materials By W. B. Yeats*, (London: Cornell University Press, 2003) p. 283.
- 8) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats The Poems*, p. 543.  
A Vision には「死後の魂は過去を忘却するようになる為には何段階かのプロセスを経なければならず、精神 (spirit) が最も突き動かされたできごと、その記憶を何度も生きるようにさせられ、そしてその最も強力なことが最初に起こる。」と書かれている。
- 9) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 531.
- 10) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats The Poems*, p. 545.